市民が選んださいたま百景

03 昔からの風土、生活を伝える風景

高度成長期の変貌

昔からの風土、生活と言ってもそんなに古いことではない。昭和20年代の地形図を見ると、それが想像できる。

低地部分には一面に水田が広がり、市街地は宿場町や城下町を中心としてコンパクトにまとまり、周辺部には農村と拠点集落が点在している。それが高度成長期以後にガラッと塗り替えられてしまった。

長屋門は豊かな農村地帯のシンボル的風景、西区土屋の永田家長屋門

貸し農園は市民の憩いの場だが、その風景は乱雑（応募風景より）

岩槻の旧御成道、市宿通りでは市民が街並み保全に取り組んでいる

そんな中で、昔からの風土や生活が残っている風景、偲ばせる風景があり、またそれらを復活した風景もある。

随所に残る農村の面影

豊かだった農村地帯の風景として、各地に長屋門が残されている。荒川周辺には水塚の家もある。加田屋新田を開発して代々名主を務めていた旧坂東家は文化施設として復元・修復され、伝統行事などを伝える場ともなっている。

建物ではなく、道や畑、農家、屋敷林の配列の中に、昔の農村の形態をとどめている風景もある。

江戸時代から続いている老舗の酒蔵などもいくつか残っている。

農事の風景は様変わり

田んぼが減少したばかりでなく、畑にもビニールハウスが並び、農事の風景もすっかり変ってしまった。市民が利用する貸し農園も多いが、だいたいは乱雑で景観としてはいただけない。

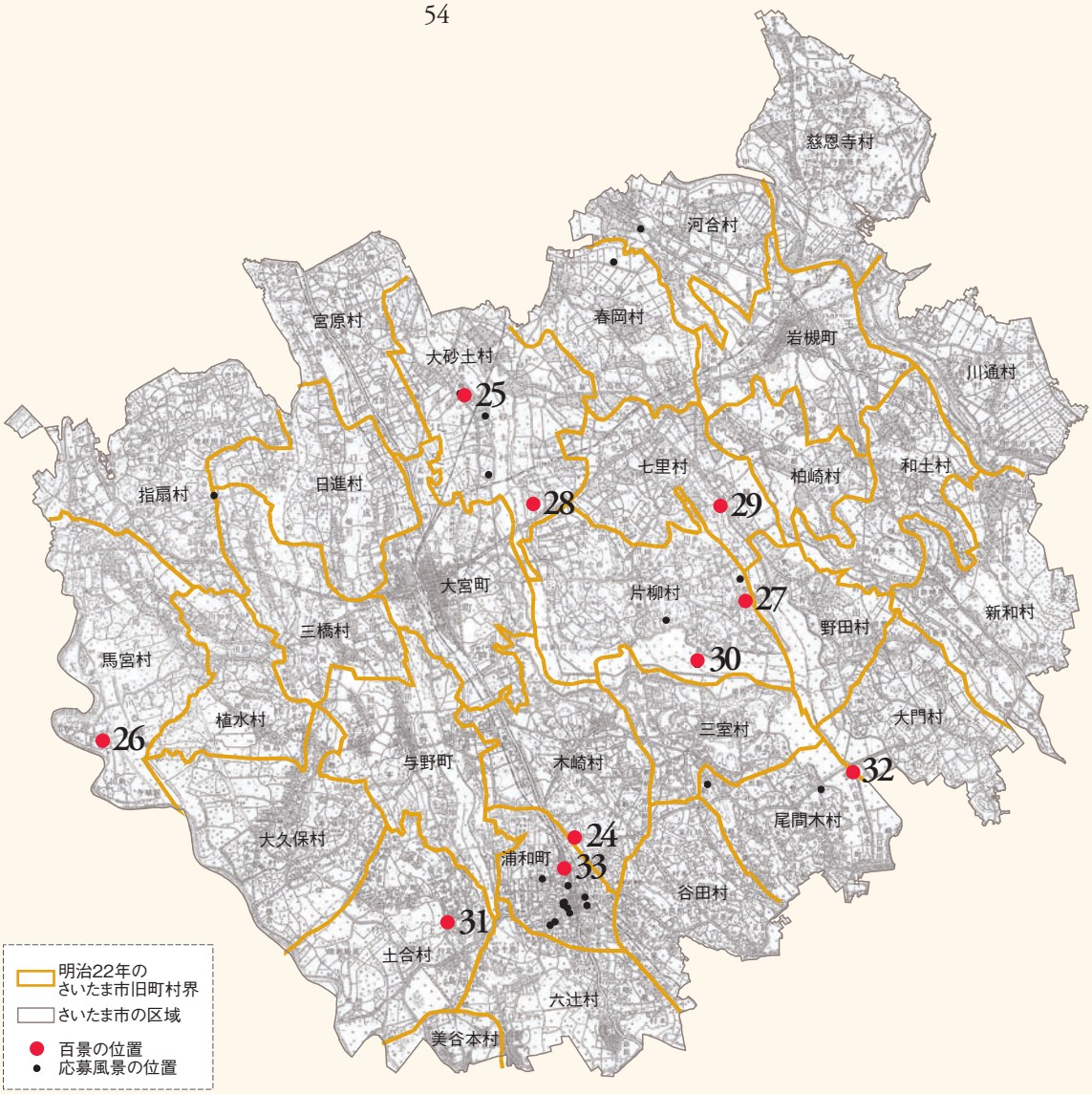
一方見沼田圃などにおいては、環境の保全と併せて伝統的な農業を維持しようとする市民の活動により、なつかしい農事の風景が復活している。

失われてしまった街並み

宿場町の街並みはすっかり失われてしまった。民家園の中に移設されている中山道の旧家や、ドミノマンションの影に取り残された町家を掲げるのは、やや皮肉が過ぎるだろうか。でも、これもさいたま市の現状を映す風景だ。

岩槻城下の市宿通りや与野本町の通りには、まだ昔の街並みがわずかに残っており、その保全・活用に取り組んでいる市民たちがいる。この分類の中では選んでいないが、さいたま市の往時の様子を伝える風景として重要なことは言うまでもない。

さいたま百景 24 本太、長屋門が並ぶ通り……46
さいたま百景 25 本郷の長屋門……47
さいたま百景 26 農村の原風景、水塚の家……48
さいたま百景 27 旧坂東家住宅「見沼くらしっく館」の餅つき……49
さいたま百景 28 柿木のある農村風景……50
さいたま百景 29 見沼、膝子の「フナノ」復活……51
さいたま百景 30 見沼市民農園の米づくり……52
さいたま百景 31 西堀、安永年間創業の内木酒造……53
さいたま百景 32 博物館として残された浦和の街並み……54
さいたま百景 33 今を映す中山道浦和宿の町家……55



本太、長屋門が並ぶ通り

浦和区本太

●代表性 ●時代性 ●参加性 ●背景性

本太三丁目に長屋門が並ぶ通りがある。今はどの家も前栽畑を垣根で囲ってしまったが、玄関に続く敷石の中間に立派に改装された瓦葺き屋根、白い漆喰の長屋門が窺える。

周囲は国道四六三号バイパスが開通し、マンションが建ち並び、屋敷林の森も分断されたが、母屋とともに各長屋門は残され、並びの脇に佇む観音堂前の八重桜が変わらぬ春を告げている。

浦和駅、北浦和駅から、ともに徒歩15分

長屋門のある風景

長屋門は、近世、諸大名が屋敷周囲に家臣を住まわせていた長屋の一部に門を開いたことに始まるという。その後上級武士の表門として広まり、郷村武士や苗字帯刀を許された豪農・庄屋にも普及し、門の両側は使用人の住居・納屋・作業所などに使われた。

市内でも各地の名主や豪農を中心に長屋門がつくられ、今に残された長屋門は母屋や庭とともに改装・手入れされ、歴史・文化を継承しながら、まちの景観にも一役買っている。

本太の観音堂

本太には二つの観音堂が残されている。一つは二丁目の天台宗瑞岸寺の観音堂。一八七二年（明治四）に廃寺となり、現在は延命寺が管理する。同堂本尊の木造観音坐像は南北朝時代に普及した衣紋垂下式の像。

もう一つは三丁目の〝長屋門通り〟にあった光臺寺の観音堂。これも観音堂だけが残る。

この長屋門のある家々はみな石井姓を名乗る。名字帯刀を許されたとき、一軒が石井としたことから右に倣えと同姓になったそうだが、同堂の四年ごとの御開帳では、これらの石井家が順番にお籠りをしているという。

観音堂周囲の一帯には、浦和駅や北浦和駅、中山道に近接しながらその喧騒が嘘のように穏やかでゆったりした時間が流れている。

本太長屋門通りのイメージスケッチ（鈴木信彦さんによる）

さいたま百景 25

本郷の長屋門

北区本郷町

●代表性 ●時代性 ●参加性 ●背景性

見沼代用水西縁を見下ろす台地上、旧原市道沿いに、競い合うように長屋門が並ぶ。旧本郷村には見沼通船の荷揚げ場があったそうで、舟運と陸路がアクセスし、人と物が行き交う豊かな農村地帯だったことが窺われる。

蓮見家の長屋門は、旧岩槻城三の丸居宅の長屋門を明治になって移築したもの。左側が剣道場になっていて、今も子供たちが稽古に励んでいるという。

宇都宮線土呂駅下車、徒歩12分

長屋門は重要な歴史的建築物

長屋門は近世では村役人か苗字帯刀を許された家しか建てられなかったそうで、豪農のシンボルであった。さいたま市内には、おそらく百棟程度が残っているだろう。

明治時代か古くても江戸末期の建築だが、農村地帯としての歴史や風土を今に伝える重要な歴史的建造物だ。

さまざまなタイプの長屋門

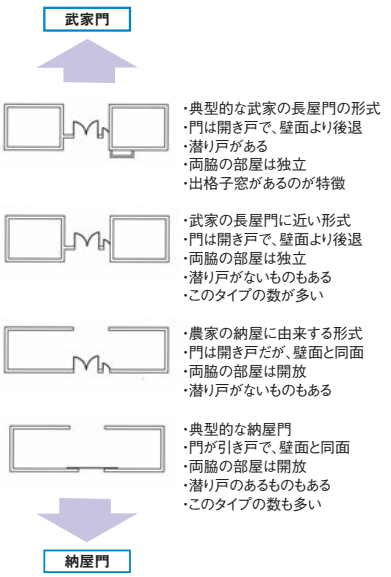
さいたま市の長屋門には、武家の長屋門に由来するものに加えて、農家の納屋に由来するものがある。

扉の形式（開き戸、引き戸）、扉面が壁面から引っ込んでいるかどうか、出格子の有無、両側の空間の開放性などに違いがある。本郷・蓮見家の長屋門は、武家系統の長屋門そのものだ。

長屋門の保全・活用を

長屋門の維持管理にはお金も掛かるが、所有者の愛着も強いようだ。西区の宝来には、失火で焼けてしまった長屋門を、自費でそっくり建直した例もある。

例えば、景観法による景観重要建造物の指定等により、公的な支援を含めて保全していくことが望まれる。



長屋門のタイプ：形態分類（旧大宮市教育委員会編「大宮の長屋門」より作成）

渡辺家長屋門の右側の土間は柿渋作りに使われていた。

農村の原風景、水塚の家

西区植田谷本村新田

●時代性 ●意外性 ●背景性

この水塚（みづか）の家は一九二六年（昭和元年）築。ちょうど、この辺りの荒川が直線化された年に建てられた。その前は旧荒川左岸の氾濫原（堤外地）にあったが、現在は荒川右岸堤内地となっている。

辺りには同様の家が数軒あるが、未だに荒川堤外地に居住しているお宅もある。自然の脅威と折り合いながら逞しく生きてきた人々の歴史が伝わる。

大宮駅西口からバス、「飯田新田」下車、徒歩６分

水塚の家

荒川・入間川は洪水が多かったことから流路の変遷が激しく、自然堤防（図の黄土色部分）が発達している。この水塚の家は自然堤防の上に位置し、一メートルほど盛土して造られている。

この地域は平坦のため、川は蛇行し河床も高く、水が出やすかった。自然堤防は比較的高い所といっても一メートルの差もなく、ひとたび水が出れば浸水は免れないところだ。このような家は利根川流域でも見かける。

洪水の記憶と荒川改修

一九一〇年（明治四三）の大洪水を契機に行われた河川改修（荒川放水路建設・荒川直線化等）は、一九五四年（昭和二九）に一応の完成をみる。市内の荒川右岸堤および堤外地に伸びた横堤は、荒川掘削土により築かれた。

しかし、戦後だけでも大きな水害が十二回ある。近年、二〇〇七年の台風九号では、三日間雨量四〇一ミリ（治水橋上流）で、この時は岩淵水門が閉鎖された。現在でも改修工事が行われており、堤防整備は道半ばである。

土地条件図における水塚の家の位置：住宅は自然堤防の際に立地している。（1：25,000 土地条件図1970年調査による）

2007年荒川洪水の折、救助される水塚の家：荒川堤外地には、治水橋脇に３軒、川越線下流側に１軒、上江橋下流に４軒、開平橋下流に２軒の住宅がある。

さいたま百景 27

旧坂東家住宅「見沼くらしっく館」の餅つき

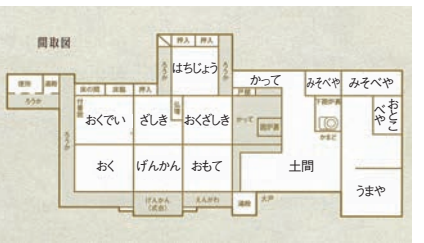
見沼区片柳

●代表性 ●時代性 ●状況性 ●参加性 ●背景性

見沼田圃の傍に、江戸時代の生活空間を再現した施設がある。現在ではなかなか見ることが出来なくなった行事や暮らしの様子を、市民が体験できる。

解体修理の際、別の場所に移す案もあったが、現地保存することになった。古民家は、元々の環境と一体に残されてこそ意味がある。さいたま市の象徴となる場所の一つだ。

大宮駅東口からバス、「三崎台」下車、すぐ



旧坂東家間取り図：かまどの形式が独特と言われている（旧坂東家住宅　見沼くらしっく館　パンフレットより）

坂東家の歴史

坂東家の初代助右衛門尚重は、延宝年間、一帯の稲作の用水源となっていた「見沼」の干拓に着手した。「加田屋新田」の開発は、享保年間、三代目助右衛門尚常に至って完成する。その後、子孫も代々この地の名主を務めるなど、坂東家は見沼一帯の発展に中心的な役割を果たしてきた。

安政年間に建てられた住宅が老朽化したため旧大宮市が保存に乗り出した。全面的に解体修理を行って一九九一年文化財に指定、旧坂東家住宅「見沼くらしっく館」として一般公開している。

建物の概要

安政四年（一八五七）に建てられたこの建物は、建坪が約八十七坪、茅葺の寄棟造りで、正面に式台を備えるなど、名主家としての格式を見せている。建物の左半分が座敷、右半分は土間で、中央に囲炉裏が据えられている。背後の屋敷林など周囲の環境も含め、江戸時代の農家の暮らしをしのばせる貴重な空間だ。

年中行事

建物の保存のため、毎日囲炉裏に火が焚かれている。

雛祭り、七夕、餅つきなど季節の行事が再現され、また、これに関連した展示や体験講座など、多彩な催しもある。

付近の斜面林や田んぼの四季おりおりの風情もあわせて楽しめるという点が素晴らしい。

囲炉裏の煙が茅葺屋根の中の虫をいぶり出す（旧坂東家住宅　見沼くらしっく館　パンフレットより）

柿木のある農村風景

見沼区大和田町

●時代性 ●状況性 ●背景性

見沼田圃に近い台地上、大和田の典型的な農村風景。広い畑を前にした長屋門のある農家、背後の鬱蒼とした屋敷林、そして道端にはかつて柿渋を取った柿木が並ぶ。渋柿ゆえにカラスも食べずに熟すままだ。

長屋門脇のムクノキの大木は、おそらく田んぼがあっただろう見沼田圃から家の場所を示していたはずだ。

東武野田線大和田駅下車、20分
大宮駅東口からバス、「大和田」下車、徒歩3分

台地上の農村形態

この辺りの台地上の典型的な農村形態は、道に面した南側に前栽畑、長屋門と母屋、そして背後の北側には屋敷林・防風林、これがほぼ東西に平行に並ぶ構造。だから、例えば東西に走る岩槻道に沿っては、南側は暗い樹林が続き、北側には畑が開けていて、その向こうに農家が並んでいる。田んぼは台地の下の見沼田圃か、そこから入り込んだ谷戸にある。

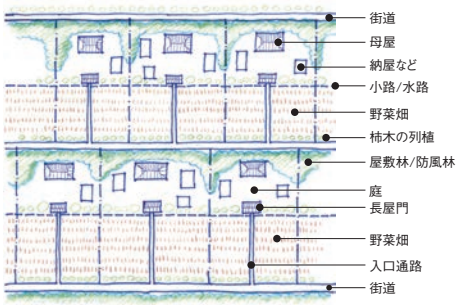
赤山柿

柿木は柿渋を取っていた頃の名残だ。柿渋は防水材料として広く使われていた。この辺りの柿渋は質がよく、「赤山柿」と言われたブランドものだったそうだ。

大和田のムクノキ

長屋門の脇にあるムクノキの巨木は、さいたま市の天然記念物に指定されている。西側の見沼田圃からもよく見え、芝川や代用水を上り下りする舟にとっての目印だったという。今は斜面林の樹木が大きくなり、また住宅も建ち並んでいるので、あまり目立たない。

見沼田圃からのムクノキの遠望



台地上における農村形態の模式図

さいたま百景 29

見沼、膝子の「フナノ」復活

見沼区膝子

●時代性 ●状況性 ●意外性 ●参加性

二〇〇八年秋、「フナノ」と呼ばれる稲藁積みが五十年ぶりに再現された。

使用した藁は約一〇トン。縦四メートル、横一・八メートル、高さ二・七メートルの舟形で、フナノの呼称もそこから。屋根の両脇には獅子頭を模した飾りもある。

この膝子の辺りは見沼田圃の原風景を多く残している所。稲刈り後の田んぼに藁積みと立ち上る藁焼きの煙。昔からの農事を伝える晩秋の風景だ。

東武野田船七里駅からバス、「膝子」下車、徒歩5分

稲藁の文化

稲は米にして食すだけではなく、籾殻から藁まで余すところなく利用された。飼肥料や燃料に、畑や庭に敷いて防寒や防霜に、植木に撒いて害虫駆除に、米俵やムシロに。とくに藁は水田の減少で今や貴重品だ。

また、日本の民族信仰は稲作と密接に結びついていたから、藁縄は「注連縄」と呼ばれて俗世から聖なるものを隔てる神聖な神具として使われてきた。

青竹四本を立て、その周囲に縄を張り巡らせてその中を神域とするのも、祭りで神様が立ち寄られる御旅所に張るのも、正月に飾る注連飾りも同じ意味。

稲藁積みのいろいろ

フナノの再現は、埼玉県立近代美術館で開かれた美術展「田園讃歌」の一環で展示された、島根、大分、愛媛の藁塚が契機になったという。

米は日本中で作っているから稲藁積みも日本中で行われてきた。見沼田圃でも、脱穀した稲束四束の穂先をくくって傘のように立て掛ける「ワラボッチ」は各所で見られる。

穂の付いた稲を竹竿で干す「はざ架け」も「ノロ」と呼ばれ、自然乾燥にこだわる農家によって続けられている。

島根県の藁積み「ヨズクハデ」。ヨズクはフクロウ、ハデははざ架けの意。大フクロウが羽を広げた形からという。

代表的な稲藁積みの名称：籾の脱穀前に干す稲塚、脱穀後の藁を保存する藁塚。稲塚と藁塚を呼び分けたり曖昧だったり、全国いろいろ。（藤田洋三著「藁塚放浪記」をもとに作成）

見沼市民農園の米づくり

見沼区見山

●状況性 ●意外性 ●参加性 ●背景性

見沼田圃でも、土地を持たないNPOによる市民農園が誕生した。さいたま市及び関東農政局管内で第一号。それも水田版はおそらく全国初だろう。見沼代用水末端水路のごみ拾いや農家を助ける援農が実を結んだという。

農繁期は米作り、農閑期は斜面林を整備しながら堆肥作り。農地に身を置く楽しさに笑いがこぼれる市民活動が、いつしかこの一帯の風物になってきた。

浦和駅、北浦和駅等からバス、「市立病院」または「南台」下車、徒歩それぞれ８分、３分

市民農園の田植え。素人による手植えだから、多少曲がっていてもご愛敬。

見沼田圃というところ

見沼田圃は首都圏三〇キロに残された約千二〇〇ヘクタールの田園。

「見沼」と呼ばれた埼玉東部最大規模の沼に始まり、江戸初期にそこが「見沼溜井」に造成され、江戸中期にそこが干されて田んぼになった。溜井に代わる水を利根川から引いてきたのが「見沼代用水」。田んぼの水の落し川として造成されたのが「芝川」。

溜井のような江戸初期に伊奈一族が行った土木技術は「関東流」「伊奈流」と呼ばれ、江戸中期になって、見沼代用水に代表される井沢弥惣兵衛為永が行った技術は「紀州流」と呼ばれる。見沼田圃は日本の農業土木技術の展示場のような所。

市民協働の必要性

見沼田圃は営農によって残されてきた農産物生産の場だが、稲作の歴史・文化を伝える場でもあり、首都圏の都市住民にとっては貴重な水と緑の空間。都市を守る治水・利水の面でも存続が望まれている。しかし、見沼田圃の水田はいまや六％程度になってしまった。

今、農家は慢性的な人手不足。一方、水と緑が枯渇する都市に生きる市民にとっては価値ある空間。そこで農家を手伝う援農が双方のニーズをつないでいる。

（上）活動団体所有のトラクターは乗用だが10馬力。まことに鈍いが見沼田圃は沼地で大きな重い農機は使えないからちょうどいい。

（中）流域の水循環を考えて無施肥・農薬無散布。だから田の草取りは欠かせない。かつては農家の当たり前の作業だったこの「カッパナシ」、今、人手があるから復活した。

（下）稲刈りがすんだらワラボッチ作り。干した稲藁は刻んで堆肥にしたり、燃やしてカリ肥料にしたり。翌年の米作りはこのワラボッチ作りに始まる。

さいたま百景 31

●代表性 ●時代性 ●参加性

西堀、安永年間創業の内木酒造

桜区西堀

一七七六年（安永四）創業の旧浦和市唯一の酒蔵。米は県産米を中心に兵庫・新潟も加わるが、水は変わらず自社内の地下水。

以前は田んぼの中にあった酒蔵も、今や周りは宅地や倉庫に変貌した。しかし酒蔵の雰囲気を醸し出すデザインで改築され、まちの景観に彩りを添えるとともに日本の文化も引き継がれた。二〇〇四年度さいたま市景観協力賞を受賞。

埼京線中浦和駅下車、徒歩10分

浦和水脈

以前、南関東には武蔵野台地で涵養された地下水が北東へ向かい、浦和で方向を変えて東京下町に流れ込む大地下水脈があった。実際豊富な地下水があって、「浦和水脈」と呼ばれた。

しかし高度成長期以降、揚水量が急増した結果、地下水脈の流れを変えてしまい、また各地に地盤沈下を発生させた。そのため水道水源を地下水から河川水に転換し、現在は一部の産業等に利用する以外は取水を制限し、地下水の温存を図っている。

酒蔵が伝える地下水脈

さいたま市には、四つの酒蔵があり、いずれも大宮台地を取り囲むように立地している。

この辺りの地下の地質を見ると、粘土層（不透水層）と砂礫層（透水層）の互層が北から南へ、西から東へ緩く傾斜し、浦和から春日部方向に「浦和地下谷」があり、それが武蔵野台地を涵養源とする浦和水脈を入れる器になっていたという。

地上の社会の発展が地下の水の流れを変えてしまったが、今に引き継がれた大宮台地を囲む四つの酒蔵が、浦和水脈本来の姿を伝えてくれている。

<さいたま市の酒蔵>

大滝酒造 見沼区膝子
創業……1884年（明治17）
代表銘柄…九重桜

鈴木酒造 岩槻区本町
創業……1871年（明治4）
代表銘柄…大手門、万両、瑞薫

小山本家酒造 西区指扇
創業……1808年（文化5）
代表銘柄…金紋世界鷹、都鷹、

内木酒造 桜区西堀
創業……1776年（安永4）
代表銘柄…旭正宗、純、うらら

博物館として残された浦和の街並み

緑区下山口新田

●時代性 ●意外性 ●背景性

国道四六三号の喧騒から民家園の入り口を一歩入ると、そこにはタイムスリップしたような懐かしい景色が広がる。広々とした敷地に茅葺屋根の民家等が並び、池にはコイがゆったりと泳ぎ、柳が揺れ、陽が差す縁側には干し大根。今にも腰を曲げ手ぬぐいを巻いたおばあちゃんが現れそうな錯覚に陥る。

見沼田圃の真ん中に忽然と現れる街並みは妙だが、こうするしかなかったのだろう。

浦和駅東口からバス、「念仏橋」下車、すぐ

浦和くらしの博物館民家園

民家園は江戸時代中期から大正期までの、市内に残された価値ある民家等を移築復元し、一九九五年に開館し、現在七棟の建物を公開している。

年間を通し小学生を対象に体験学習が行われ、昔のくらしと知恵を体験指導している。また、一般市民対象向けの、古民具や収穫した植物等を使っての体験教室も好評。土蔵造りの石蔵は展示室として使用されている。

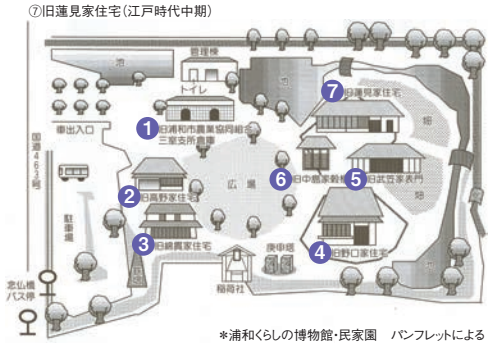
周辺散歩

見沼田圃のほぼ中心に位置し、周辺には四季を通して楽しめる自然や文化財がたくさんある。特に桜の季節には、見沼用水沿いの桜並木を東浦和方面に歩くと美しい。

民家園案内図

保存されている建物（建築年代）

①旧浦和市農業協働組合三室支所倉庫（大正8年）
②旧高野家住宅（江戸時代末期）
③旧綿貫家住宅（江戸時代末期～明治初期）
④旧野口家住宅（江戸時代末期）
⑤旧武笠家表門（江戸時代後期）
⑥旧中島家穀櫃（江戸時代後期）
⑦旧蓮見家住宅（江戸時代中期）



＊浦和くらしの博物館・民家園　パンフレットによる

中山道にあった町屋（煎餅屋）の中から往来を見る

さいたま百景 33

今を映す中山道浦和宿の町家

浦和区常盤

●時代性 ●意外性 ●背景性

南北に走る中山道沿いの沿道は、高容積率の商業地域に指定されており、「文教都市・浦和」の宣伝文句のもとに、高層分譲マンションの建設が進んだ。宿場町特有の短冊形敷地に建つ東西に長い壁状の建物は、従来の町家のみならず北側のマンションの日照も奪い、ドミノマンションと呼ばれて、わが国の都市計画の欠陥を示す好例として全国に知られるところとなった。

浦和駅西口下車、徒歩10分

浦和の都市形成史

一六〇二年（慶長七）、徳川家康が江戸を中心とした宿駅制度を整えるために中山道各宿に伝馬を命じたことにより、それまでの岩付城勢力下の一寒村が浦和宿として歴史の表舞台に登場したが、江戸時代を通して小規模な宿駅に留まった。

さらに一八七一年（明治四）の廃藩置県に伴い、予定されていた岩槻に代わり奇跡的に埼玉県庁所在地となり、師範学校をはじめとする県施設の立地が、その後「文教都市」、「住宅都市」と呼ばれる現在の浦和の中心市街地の基礎となった。

わが国の都市住宅

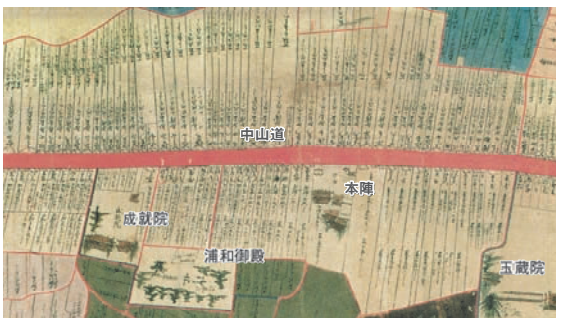
町家とは、一般に数間の接道間口に対し数倍の奥行きを持って連続する敷地に、店と住居と庭と蔵などが一定のルールのもとに並び、近隣の居住環境を担保するわが国の近世に発展した低層高密の都市住宅形式である。

一方のマンションは、高度経済成長期以降の地価の高騰と持家志向の高まりに対応した区分所有法のもと、都市居住を想定した不動産商品として開発され、現在では新築住宅物件の半数以上を占める住宅形式であるが、敷地に係る法規を限度一杯使った単体商品で、都市の環境への担保は何もない。

現代町家の提案

近年、大学都市計画研究室の主導のもと、沿道住民の参加を得て中山道沿道の現代町家の研究が進められたが、その成果は活かされることなく現在に至っている。

無秩序なドミノマンションの建設は今もなお続いている。



浦和宿絵図（さいたま市蔵）部分：街道に沿った短冊形の敷地割は、今も概ねそのまま引き継がれている。